

「対話」が成立するためには、 何が必要か？

哲学カフェの経験から

永井良和(世話人)

哲学カフェという言葉は、皆さんには、なじみがないかもしれませんが、このようなとりくみは、各地にあり、居場所作りのものから対話の深まりを重視するものまで、いろいろなタイプのもがあるようです。もともこのとりくみは、朝日新聞に「折々のことば」を連載されている鷲田清一さんがはじめられたもので、この会でも足かけ5年にわたって、ほそぼそやってきました。うまくいかないときもありましたが、やってきてよかったと思っています。とくに、この場がなければ出会うことのなかっただろうさまざまな世代のさまざまな考え方の人たちとであって、いろいろなテーマについて話せたことは、貴重な体験でした。前回の哲学カフェで、文章を送って参加された方が書かれていたように、今の日本社会は、「対話」、とりわけさまざまな立場や考え方の違いをのりこえた対話

が、成立しにくい社会になっていると思います。もちろん、いつの時代にも思想や考え方の違いによって、たくさんの方の対立がありました。でも、現在、日本だけでなく、ヨーロッパやアメリカで起きている、思想や政治的な立場をめぐる鋭い分断や対立、あるいは「ポスト・トゥルースの時代」という言葉に象徴される、「ことば」への不信感には、強い不安を感じます。

わたしたちが、言葉や会話、対話を離れて生きていけないことは、明らかです。でも、あらためて「対話」とは何かを考える機会は、意外と少ないかもしれません。会話や対話の本質は、どこにあるのでしょうか。あるいは、わたしたちは、会話や対話に何を求めているのか？という時に、対話がかみあい、どういう時に対話が失われるのでしょうか。

たとえば、平田オリザさんの「わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か」という本では、「対話」を損なうものとして、日本人特有の「わかりあえるはず」という思想の弊害が強く指摘されており、とても説得的です。しかし、他方で森田伸子さんの「子どもと哲学を」という本で紹介されている、自死を選んだ子供たちの悲痛な声には、「ことば」が伝わらない絶望感と、わかりあうことを拒否する、深いニヒリズムが響いています。これらの材料を通して、語り合うことの意味について少し深く考えてみたい。日常の場面から、政治的な対話の場面まで含めて、「対話」が生み出す力と、逆に「対話」が失われていく理由について、みなさんそれぞれが感じておられることを語り合えたらと思っています。



第一回の感想

お話 平尾剛さん オリンピックと近代スポーツ

オリンピックはなくてよい。はじめは、ここまで広く根付いてしまった祝祭を廃止することは流石に無理だろうと思いましたが。しかし、哲学カフェで平尾剛さんの話を聞き、よく考えてみると、続けることの方が無理なことだと思ひ至りました。オリンピックは巨大化・商業化・利権化され、近代の負債として人類に重くのしかかっています。格差、貧困、気候変動など、既に様々な負債を抱えた上にウイリスの脅威に晒されるポスト近代の世界には無用どころか有害でしかない。どんなに頑張ってもエコロジーとサステイナビリティの対極にある地位は微塵もゆるぎません。東京オリンピック中止を機に廃止すべきです。(阿部@仙台)

平尾さん、深く、刺激的なお話しをありがとうございました。参加者の皆さんの問い掛けやご意見の一つ一つも心に残るもので、充実した時間でした。平野さんのお話を聞きながら、現場のスポーツ記者としての自分自身に向けて投げ掛けられている言葉のように感じました。お話にあった、オリンピックや高校野球に象徴されるコンペティション重視の姿勢は、新聞記事の方向性そのものです。一方で、この危機が「スポーツの本質に気づき、見つめ直すチャンス」だ、との指摘も心に響きました。スポーツ報道も分岐点に立たされておられ、新たなスポーツ像を提示する努力をするべき段階なのだと気づかされた気がします。(小池直弘)

新型コロナのワクチンは来年には間に合わず、東京五輪はたぶん開催できないでしょうから、今後、五輪自体が大きく変わらざるを得ないでしょう。開催国の国威イベントとしては、コストとリスクがかかりすぎ

ので…。どんな形になるか、分かりませんが、たぶん良くなることはないでしょう。「ある意味、スポーツ界におられる方が、愚直に、正論を発信し続けておられることに感動しました。スポーツを愛しておられるからこそ、なのだろうと思います。政策論として、オリンピック開催の是非を論じるのか、スポーツそのものの現在のあり方について論じるのか、哲学カフェとしては、少し、あつかいの難しいところもありましたが、スポーツに関わっている人にこそ、オリンピックや現在のスポーツのあり方に感じる疑問を、きちんと伝えていくことが必要だと知らされた気がします。この問題についても、やはり、違う立場や違う考えをお持ちの人と対話したかったです。その意味で、「違う立場や違う思想の人たちが、ふれあい、経験を共有する機会」の意義について、メッセージを送ってこられた方の意見は、とても貴重だと思いました。」(永井)

新型コロナウイルスは来年には間に合わず、東京五輪はたぶん開催できないでしょうから、今後、五輪自体が大きく変わらざるを得ないでしょう。開催国の国威イベントとしては、コストとリスクがかかりすぎるので…。どんな形になるか、分かりませんが、たぶん良くなることはないでしょう(M)。

元フーリマンは一貫して東京オリンピック二〇二〇の開催に反対している。競争原理と商業主義に支配されているオリンピックに、本来スポーツの持つ「自発的創造性」は求めるべくもない。東京オリンピック一九六四に「世代の共有体験」(当時一二歳)を持つ身としては全面的に平尾氏の意見に賛同する。あの素直な感動はもう戻ってこない。二〇二一年にビヨンド・コロナが実現したとしても、金儲けの金メダル競争に

墮したオリンピックの存在意義はないだろう。中止に追い込むためには、ひとりひとりが立ち止まって考えること。自分で自分の声を上げていくこと。つまり哲学していくことだと思う。ビヨンド・コンペティションの道を模索したい。(田中文夫)

コロナウイルスをきっかけに、どこかブルー視されていた色んなものが「見える」ようになった。アーティストが窮状を訴えれば「何を贅沢な」と。パチンコ屋はあからさまな敵視の対象に。スポーツもそのひとつなのだ。今回の哲学カフェに参加して強く思った。以前なら「オリンピック不要」とだけだけの人が口に出た。ただ、そうか。高校球児も特別な存在ではなかった。ただ、そうして見えてきたものを「いるか、いないか」だけで語るのではなく、それをきっかけに対話として深めることができる。と。今回のテーマ、続編があれば参加してみたい。(E)

高校生のイベントが軒並み中止になっている。マスクの論調はおおむね、最後の夏(秋)を心待ちにしていた子どもたちがかわいそうだということだろう。もちろんそれを目指して練習してきたことを思うと、心の中がばかりかと考える。ところが、中止の決定があったなかで改めて高校スポーツがどういった体系の中にあるのかがはからずも見えてしまった。オリンピックも然りである。職業スポーツを頂点にアマチュアから小学校の部活動までをがっちり取り込んだものになっていると。いことだ。平尾さんは「運動がどれだけ身体を健やかにするか」という観点でスポーツを考えることを教えてくれた。「教育の名のもとに『勝利』だけを目指す指導が横行しているかも教えてくれた。(Y)



電子版(オンライン)哲学カフェについて…

第六期の哲学カフェは、新型コロナウイルスの流行に配慮して、ZOOMを使ったオンライン形式で行っています。参加していただける方は、前日までに下記アドレスまでのメールをお送りください。開催時間までに「参加承諾」メールを送付します。詳細はホームページをご覧ください。

なお、パソコンなどの電子機器をお持ちでない方は、**先着三名様まで**従来の会場「ムーレック」にて参加いただけます。事前に電話でお申し込みください。

「ムーレック」のご案内
電話 075-462-3311

交通機関 市バス 等持院道下車

哲学カフェ【問答連】今後の予定

三回 七月二五日

危機の時代をどうとらえるか

大江矩夫さん(世話人)

四回 八月二三日

わたしとわたしたち 「線引き」ということ

野崎康夫(世話人)

五回(特別講座) 九月中頃(日程未定)

ケア労働とベーシックインカム

山森 亮さん(ゲスト)



mojyaking @ hotmail . co . jp

本文には
①「お名前」当日は匿名可ですができれば本名を)
②「哲学カフェに参加します」のみで結構です。

